

はじめに

昨今の国の描くビジョンは「地域」を主軸にして構想されている。2016年の社会福祉法改正では、地域共生社会の実現を目指す構想、さらに2021年には重層的支援体制整備事業が創設された。これまで日本の社会保障は、人生のセーフティーネットとして発展してきた。福祉制度・政策は、子ども、障害、高齢者といった対象者の属性や、それぞれが抱える課題に対して制度が設定されている。しかしながら、昨今の複雑な社会情勢の中、人びとが直面する困難や生きづらさは多様化、複雑化し、これらのニーズに対応する制度の限界を補う対応策の充実が求められている。立ちほだかるこれらの切実なる現状に、ソーシャルワーカーはその専門性を発揮することが求められている。これはソーシャルワークがミクロからメゾ、マクロへ大きく転換していることを示している。

さて本書には、ソーシャルワークを体系的に理解できるように構成され、先に刊行された『ソーシャルワーク論Ⅰ——基盤と専門職』と共に、新たな社会福祉士養成カリキュラムに対応できるよう、「ソーシャルワークの理論と方法」「ソーシャルワークの理論と方法(専門)」にあたる内容を十分に盛り込んでいる。2部構成になっており、第Ⅰ部では、ソーシャルワークの理論を学ぶ。ここでは、ソーシャルワークの援助過程や援助関係についての理解、さらに、ソーシャルワークの理論やアプローチをしっかりと学んでほしい。それを基盤に第Ⅱ部では、ソーシャルワーカーが、個人や家族、グループ、組織、地域社会を対象とした支援に必要なそれぞれの方法論が学べる。さらに協働や連携、ケアマネジメント、スーパービジョンの理解、記録、カンファレンス、事例分析など幅広い知識を獲得できる内容となっている。

本書の出版にあたり、にこん社・北坂恭子氏には大変ご尽力いただいた。また、法律文化社様には、ソーシャルワークに関するテキストを刊行する機会を、私どもに与えてくださったことに深く感謝する。関係者の皆様に心から感謝を申し上げる。

2023年6月

編著者